

保健だよりに対する学生の意識と講義後の意識

Consciousness of students about school health newsletters for prospective *Yogo* teachers

河田史宝 西澤 明*

I. はじめに

養護教諭を対象に養護教諭の専門誌が行った調査では、養護教諭の95%が定期的に保健だよりを発行していた¹⁾。その保健だよりには、保健指導的な内容、健康に関する知識、保健行事の内容や事後報告などが書かれ、発行回数は、月に1回発行している場合が多い状況であった。保健だよりの記事を書く際に参考にしていたものは、専門誌やインターネット、書籍、新聞などを参考にしていて、宮本ら²⁾は、専門雑誌に掲載されている保健だより(2007年～2011年)144通を機能別に分類し、保護者や子どもへの健康知識について書かれた「知識」の機能を多く含んでいることを明らかにしている。藤田³⁾は、養護教諭が発行する保健だよりは学級担任が発行する学級通信よりも意味が大きく、児童生徒への教育的な働きかけを行う養護実践として、多様な機能を持って活用されていることは他に類をみないととらえている。しかし、その保健だよりに対する教授法を検討した研究は行われていない。そこで、本研究では養護教諭の実践に活用されている保健だよりの学びの手立てを検討することを目的とした。

II. 講義での「保健だより」の取り扱い

養護教諭特別別科⁴⁾は、1年制である。講義における保健だより(作成方法、活用方法)の取り扱いは、「養護概説」「養護実習」「養護実践(健康診断を含む)」の3科目により横断的に行っている(表1)。講義科目はいずれも必修科目(2単位)である。まず、「養護概説」では、学生がこれまで受け取った保健だよりを振り返り、今後養護教諭としてどのような保健だよりをどのように作成・活用して行くかを考える。講義

後、その学びを活用して保健だよりを作成し、クラス全体で検討会を行う。「養護実習」では、5月の講義をもとに実習校で1枚から3枚の保健だよりを作成している。「実習事後指導」では、作成した保健だよりを活用し、作成の目的、使用方法などの検討と保健だよりの改善を図っている。2013年度から追加した「養護実践(健康診断演習を含む)」の「紙面情報をわかりやすく伝えるための美術的技法」は、学級担任であり美術科教師が教授者である。手書きの学級通信を活用した学級経営を行っており、発行の意図や生徒を育てる目的をもって実践を積み重ねている実践家である。講義前に養護実習で作成した保健だよりを確認できるように講義日を設定した。講義内容は、学級担任としての学級通信の作成意図をもとに、養護教諭が作成する保健だよりの作成意図と留意点、具体的な作成方法である。資料として学級通信が配布され、作成意図と内容、イラスト、文字の書き方等が講義され、養護教諭として保健だよりにどのように活用するかを考えさせる内容であった。

表1 科目横断的な「保健だより」の取り扱い

科目名	時期	内容
養護概説	5月	保健だよりを活用した健康教育 講義をもとに養護実習の校種に 合わせて保健だよりを作成す る。
養護実習	9月	養護実習校で保健だよりを作成
実習事後指導	10月	保健だよりの改善
養護実践(健康診断演習を含む)	11月	紙面情報をわかりやすく伝える ための美術的技法 (現職教員)

Ⅲ. 研究方法

1. 対象者

対象者は、養護教諭特別別科で学ぶ学生 36 名とした。

2. 調査方法

調査は、「養護概説」の講義前に保健だよりに対する学生の意識調査（調査 1）を留置き式により実施した（2013 年 5 月 17 日）。さらに「養護実践（健康診断演習を含む）」の講義終了直後に調査用紙（調査 2）を配布し、記入後回収を行った（2013 年 11 月 12 日）。いずれも自記式質問紙である。

3. 調査内容

（1）調査 1：保健だよりに対する学生の意識調査

「あなたが、これまでに受け取った保健だよりを思い出して、次の問いに答えてください」と教示した。「これまで学生が受け取った保健だよりの印象（保健だよりに対する印象）」を 2 件法で求め、印象に残っていると回答した者に対しては、小学校、中学校、高等学校別に印象に残った内容を自由記述により求めた。「保健だよりを楽しみにしていたかどうか（保健だよりを読む楽しみ）」は 2 件法により回答を求め、それぞれ選択した理由を自由記述によりを回答求めた。さらに、楽しみにしていたと回答したものに対しては、どんな内容が楽しみであったかを自由記述により求めた。

（2）調査 2：「養護実践（健康診断演習を含む）」の「紙面情報をわかりやすく伝えるための美術的技法」の授業評価

質問項目「講義の説明の分かりやすさ」「講義内容の今後の活用」「自己能力向上への役立ち感」の 3 項目に対して、はい（++）からいいえ（--）の 4 件法により求め、それぞれの選択理由を自由記述により記載を求めた。「講義の感想」は、学んだことや今後にか

きたいことを自由記述により求めた。

4. 分析方法

自由記述の分析は、質問ごとに記述どおりに回答を入力した後、Berelson の内容分析の方法を用いて、記述された文脈の意味を損なわないようにコード化し、意味内容の類似性にしながら分類後、サブカテゴリー＜＞、カテゴリー【】を抽出した。命名は、内容を反映した表現を用いて命名した。

5. 倫理的配慮

調査の実施にあたっては、研究目的を口頭にて説明し、質問への回答は自由意志であること、回答しなくても不利益を被らないことを説明した。また、研究の目的以外には使用せず、公表にあたっては個人が特定されないように配慮することを説明した。

Ⅳ. 結果

1. 調査 1「保健だよりに対する学生の意識調査」の結果

（1）保健だよりに対する印象

これまでに受け取った保健だよりの印象が残っている割合は、印象に残っている者は 19 名（52.3%）、印象に残っていない者は 17 名（47.2%）であり、ほぼ同数であった。

保健だよりが印象に残っていると回答した 19 名に対して、印象に残っている校種をたずねたところ、小学校 13 名（36.1%）、中学校 9 名（25.0%）、高等学校 4 名（11.1%）の順であった。印象に残っている保健だよりの内容を表 2 に示した。いずれの校種にもインフルエンザ、かぜ、熱中症が含まれていた。小学校では、手洗い、歯磨き・噛む、うがい、食事・給食の日常的内容が多く、中学校では修学旅行、大会の際のけが、高等学校ではストレスの内容が印象に残る内容となっていた。

表2 印象に残っている保健だよりの内容（校種別）

校種	印象に残っている内容
小学校 (27)	インフルエンザ・かぜ・感染予防 (6)、歯磨き・噛む (5)、うがい (4)、手洗い (4)、食事・給食 (2)、健康診断の内容 (1)、季節に合わせた保健指導 (1)、熱中症 (1)、こころ (悩み) (1)、雑学的な情報 (1)、マンガ (1)
中学校 (12)	インフルエンザの予防 (2)、修学旅行における体調管理 (2)、バランスの良い食事 (2)、熱中症 (夏休み前) (1)、大会の際のけがの注意と他校とのトラブル (1)、検診予定 (1)、食中毒 (1)、長期休みの過ごし方 (1)、感染症と予防接種 (1)
高等学校 (5)	インフルエンザ、かぜ (1)、校内で熱中症により倒れた人数 (1)、ストレスについてのチェックリスト (1)、〇×クイズ (1)

() 内の数字は記述数である。

(2) 保健だよりを読む楽しみの有無とその理由

保健だよりを読む楽しみの有無とその理由を表3に示した。保健だよりを読む楽しみがあった者は11名(31.4%)、楽しみがなかった者は24名(68.6%)と、読む楽しみがなかった者のほうが多かった。保健だよりを読む楽しみがあった者の理由からは、【興味を引く内容】【知らない情報の掲載】【委員会活動の記載】【イラストや4コマ漫画】の4カテゴリーが抽出された。「自分の体に関する内容」「興味のある内容」から【興味を引く内容】、「専門的知識」「初めて知る事実」から【知らない情報の掲載】となっていた。読む楽しみがなかった者の理由は、【興味関心がなかった】【保護者が読むものだと思っていた】【文字が多く読みにくい】【ありきたりの内容であった】の4カテゴリーが抽出された。【興味関心がなかった】のコード数が最も多く、「興味を持っていなかった」「健康に関心がなかった」のコードから成っていた。次いで、【保護者が読むものだと思っていた】は、「親に渡せば良いプリント」「担任から自宅に持ち帰るように指示された」から成っていた。【文字が多く読みにくい】【ありきたりの内容であった】などの保健だよりの紙面構成や記載される内容に関する

カテゴリーが示された。

読む楽しみがあった者が楽しみにしていた内容を、表4に示した。【知らないことや詳しい内容】【先生の4コマ漫画や一言コラム】【豆知識やためになる話】【図や絵がある視覚的な内容】【クイズ形式】の5カテゴリーから成った。【知らないことや詳しい内容】では、「手洗い、うがいにしても手にどれだけ菌がいるとか、ちょっと突っ込んだ内容」「食事に関して、どんな食事にはどんな栄養があるのか、その栄養素はどんな働きがあり、どんなときに何を食べると効果的なのかという内容」などの科学的根拠に触れる内容や、「中学校・高校では、身体について興味を持ち始め、保健だよりに関係している内容があったため、楽しみにしていた」など子どもたちの成長発達に伴う内容があり、より詳しい内容が読む楽しみにつながっていた。養護教諭が書く【先生の4コマ漫画や一言コラム】などの内容が読む楽しみにつながっていた。

表3 保健だよりを読む楽しみの有無とその理由

読む楽しみの有無	その理由
読む楽しみがあった 11 (31.4)	【興味を引く内容】(6) 自分の体に関する内容、興味のある内容 【知らない情報の掲載】(4) 専門的知識、初めて知る事実 【委員会活動の記載】(2) 委員会活動など自分たちの活動 【イラストや4コマ漫画】(3) イラストが描いてある、4コマ漫画、クイズ
読む楽しみはなかった 24 (68.6)	【興味関心がなかった】(20) 興味がなかった、健康に関心がなかった 【保護者が読むものだと思っていた】(8) 親に渡せば良いプリント、 担任から自宅に持ち帰るように指示された 【文字が多く読みにくい】(5) 文字ばかりで読む気がしなかった 【ありきたりの内容であった】(3) ありきたりの内容、毎年同じ内容だった

【 】はカテゴリー、他はコード、() 内の数字は記述数

表4 楽しみにしていた保健だよりの内容

カテゴリー	主な記述内容
知らないことや詳しい内容 (4)	手洗い、うがいにしても、手にどれだけ菌がいるとか、ちょっと突っ込んだ内容 食事に関して、どんな食事にはどんな栄養があるのか、その栄養素はどんな働きがあり、どんなときに何を食べると効果的なのかという内容 中学校・高校では、身体について興味を持ち始め、保健だよりに関係している内容があったため、楽しみにしていた
先生の4コマ漫画や一言コラム (3)	先生が毎回保健だよりに4コマ漫画を書いてくれていて、友達と楽しみにしていた 先生が一言コラムを書いていて、それも楽しかった
豆知識やためになる話 (3)	マメ知識のようなものが書いてあったのが楽しかった
図や絵がある視覚的な内容 (1)	図や絵があると視覚的にも理解でき、興味がわいた
クイズ形式 (1)	クイズ形式で、これに当てはまる人注意のような内容

() 内の数字は記述数

2. 調査2「養護実践(健康診断演習を含む)」の「紙面情報をわかりやすく伝えるための美術的技法」の授業評価結果

(1) 講義の説明の分かりやすさ

説明の分かりやすさは、はい(++)が34名(97.1%)、(+)が1名(2.9%)であった。評価に対する具体的記述から3カテゴリーが抽出された(表5)。<伝えたい内容がまとまっていた><何が大切なのか短くまとめてあり分かりやすかった><パワーポイントに簡潔にまとめられていて分かりやすかった>から【ポイントが明確であり理解することができた】、<体験談や経験がありイメージしやすかった><具体例や具体的資料がありイメージしやすかった>

から【経験談や具体例によりイメージしやすかった】、<説明も理解しやすかった><分かりやすかった>から【説明が分かりやすかった】が抽出された。

(2) 講義内容(資料を含む)の今後の活用

講義内容の今後の活用は、はい(++)が28名(80.0%)、(+)が7名(20.0%)であった。

評価に対する具体的記述から5カテゴリーが抽出された(表6)。<内容構成><作成時の考え方や書き方の基本><コラムやメッセージの入れ方><分かりやすい構図のとり方>から【保健だよりを書くときの

考え方や基本】、＜紙面構成のイメージがで
き参考になった＞＜ねらいや興味を引く工
夫が参考になった＞から【学級通信の資料
が参考になった】、＜ペンの使い分け＞＜す
ぐ使える技法＞から【ペンの使い方、文字・
絵の描き方】、＜イラストの描き方のポイン
ト＞＜文字のレイアウト＞から【イラスト
や文字のレイアウト】、＜保健だよりだけ
でなく様々な場面で使える基本＞から【様々
な場面での応用が可能】が抽出された。

(3) 自己の能力向上への役立ち感
自己の能力向上への役立ち感は、はい
(++)が25名(71.4%)、(+)が10名(28.6%)
であった。評価に対する具体的記述から 5
カテゴリーが抽出された(表 7)。【保健だ
よりに対する考え方】【実践に結びつくスキ
ル】【手書きのよさ】【教員としての考え方】
【自分のスタイル作り】の5カテゴリーが
抽出された。

表5 説明の評価に対する具体的記述

カテゴリー	サブカテゴリー
ポイントが明確であり、理解することができた (13)	伝えたい内容がまとまっていた 何が大切なのか短くまとめてあり分かりやすかった パワーポイントに簡潔にまとめられて分かりやすかった
経験談や具体例によりイメージしやすかった (11)	体験談や経験談がありイメージしやすかった 具体例や具体的資料があり、イメージしやすかった
説明が分かりやすかった (8)	説明も理解しやすかった 分かりやすかった。

無記入7名を除く ()内の数字は記述数である。

表6 講義内容(資料を含む)の今後の活用に対する具体的記述

カテゴリー	サブカテゴリー
保健だよりを書くときの考え方や基本 (12)	内容構成 作成時の考え方や書き方の基本 コラムやメッセージの入れ方 分かりやすい構図のとり方
学級通信の資料が参考になった (10)	紙面構成のイメージがで参考になった ねらいや興味を引く工夫が参考になった
ペンの使い方、文字・絵の描き方 (7)	ペンの使い分け すぐ使える技法
イラストや文字のレイアウト (7)	イラストの描き方のポイント 文字のレイアウト
様々な場面での応用が可能 (3)	保健だよりだけでなく様々な場面で使える基本

無記入7名を除く。()の数字は記述数である

表7 自己の能力向上の役立ち感に対する具体的記述

カテゴリー	サブカテゴリー
保健だよりに対する考え方	保健だより作成時に大切な考え方・視点 (3) ねがい (方向) とねらい (方法) をもった作成 (2) 何を通信で伝えるか、どう伝えるかの考え方 (2) 保健だよりを発行する目的や、活用の仕方 (2)
実践に結びつくスキル	絵の描き方のポイント (3) 紙面情報の配置方法 (2) 保健だよりの作成時に使用できる用具 (2) 実践に結びつくイメージ 具体的な技法
手書きのよさ	手書きの保健だよりのよさ (2) 手書きのイラストがある通信や保健だよりのよさ 手書きで分かりやすい保健だよりの作成意欲
教員としての考え方	たより以外にも活用できる願いやねらいの考え方 (2) 教師の仕事をする上で大切な考え方 (2)
自分のスタイル作り	自分のスタイル作りの意義

無記入を10名除く () 内の数字は記述数である。

(4) 講義に対する感想

講義の感想を整理し、表8に示した。内容は、【保健だよりの内容やレイアウトの工夫】【保健だよりの「願い」と「ねらい」】【自分の経験を振り返る】【教育観や授業観への関連付けた思考】【今後作成したい保健だより】の5つに分けることができた。【保健だよりの内容やレイアウト】では、「子どもたちが今注目していること、話題になっていること、現状の課題などしっかりと把握して」「一方的に伝えたいことを載せるのではなく」「内容もニーズに合うようなものにしていく」ことや、「保健だよりは養護教諭が全校生徒・児童に思いを伝える大切な手段」であるため「思いだけではなく、対象となる人を考え、その人に読んでもらう工夫」をして行く必要性を記述していた。【保健だよりの「願い」と「ねらい」】では、「子どもたちに読んでもらえる保健だよりを作ること大切だが、何よりも子どもたちに自分が何を伝えたいかを明確にしておくことが重要だ」「何より大切なのは、そもそも自分は養護教諭として子どもたちにどんな力を育みたいのか？何のために？という“ねがい”を自分の中でしっか

り確かなものにしておく」と養護教諭自らが保健だよりに対する考えを明らかにしておく必要性を記述していた。【自分の経験を振り返る】では、「保健だよりを作る」ことが目的になっていた自分に気付かされた」「まず自分が伝えたいこととか好きな構成やイラストが優先になっていた」ことを振り返り、「その学校（それぞれの教室や保健室など）オリジナルの特色を取り入れたものでタイムリーな内容であることの大切さが分かった」ことが記述されていた。また、「時期ばかりに気を取られていた」「“上手に作ろう”や“マネをしてみよう”といった考えが先行している自分がいる事に気付いた。」「ねがいを持ちながらも目先のねらい（方法）にとらわれ、時に見失ってしまっていたこともあった。」ことへの気づきも書かれていた。

表 8 講義後の感想

【保健だよりの内容やレイアウトの工夫】

- ・読んでもらえる保健だよりを作成するためには、やはり子どもたちが今注目していること、話題になっていること、現状の課題などしっかりと把握して取り上げていく必要がある
- ・子どもたちがポイっとするのは子どもたちが悪いのではなく読んでもらえるものを作ることが大切なんだと考え直した。
- ・一方的に伝えたいことを載せるのではなく、見やすさや子どもが読みたい！読もう！と思える保健だよりを作りたい。そのためには、レイアウトや文字・絵の描き方を工夫する他、内容もニーズに合うようなものにしていくことが大事だと思う。
- ・学級（担任）通信も、保健だよりも、見てもらいたい人に見てもらわなければ意味がないということを改めて考えることができた。発信者の“知ってもらいたい、伝えたい”という思いだけではなく、対象となる人を考え、その人に読んでもらう工夫を常にしていかなければいけないという事を知るきっかけとなった。
- ・保健室から発行する保健だよりは養護教諭が全校生徒・児童に思いを伝える大切な手段なので、少しでも自分の思いが伝わるような保健だよりを作っていきたい。
- ・子どもたちが読みたいと思えるものとなるよう内容やレイアウト、イラストの活用など工夫して、コミュニケーションを深めるきっかけとしてもしたい。
- ・最近はPCで作った資料やお便りが多いが、手書きの温かさがこもったものを、どんどん作りたいと思った。
- ・パソコンで作成することが多かったが、手書きの方が味わい深く、温かみのある「たより」になると感じた。
- ・通信の中に子どもたちの言葉、先生からのコメントを書くことで親近感もわき、子どもたちとの関係づくりにもなる。
- ・子どもたち、保護者が読みたいと思ってもらえるようなものとなる内容やレイアウトを考えていきたいと思った。
- ・自分が伝えたいということばかりではなく、子どもたち、そして保護者が知りたいこと・事実を見たり聞いたりすることで捉え、内容に盛り込んでいくことの必要性を感じた。

【保健だよりの「願い」と「ねらい」】

- ・イラストや工夫あるデザインによって子どもたちに読んでもらえる保健だよりを作ること大切だが、何よりも子どもたちに自分が何を伝えたいかを明確にしておくことが重要だと学んだ。
- ・保健だよりは子どもたちや保護者にいろいろな情報を伝えるとても大切なツールであると思っていたが、ただ作るのではなく、明確な「ねがい」と「ねらい」をもって作ることの大切さを学んだ。
- ・何より大切なのは、そもそも自分は養護教諭として子どもた

ちにどんな力を育みたいのか？何のために？という「ねがい」を自分の中でしっかり確かなものにしておくことが大切であることを学んだ。そうしないと、軸がぶれてしまったり、ただ前任者のマネをしているだけになってしまう。

- ・確かに「ねがい」を明確にせずに「ねらい」ばかりに着目してしまうことが多いので、これからは「ねがい」をしっかり持っていきたい。
- ・現在はパソコンで簡単に作ったり、検索すれば画像としてたくさん載っているのそのままコピーして使うこともできるが、やっぱり自分が子どもたちに伝えたいことや子どもたちに将来こうなってほしいという思いを書くことが大切だ。
- ・養護教諭といえば、保健だよりを発行するものだから作成するというのではなく、子どもたちに何を伝え、どうなってほしいかを考え、そのために子どもたちに伝わるたよりを作成することが本来の目的だと学んだ。

【自分の経験を振り返る】

- ・この講義を通して、「保健だよりを作る」ことが目的になっていた自分に気付かされた。
- ・実習中も保健だよりを作成したが、子どもたち宛てに届けたという部分が大きくて、保護者や同僚宛という部分をあまり考えずに作成していた。そのため今後作成する際は誰に見て欲しいのか伝えたいのかをもう少し考えながら作成していきたい。
- ・今まで自分で作成していた保健だよりは、まず自分が伝えたいこととか好きな構成やイラストが優先になっていたような気がした。
- ・保健だよりを作成する時、ついつい型とか保健だよりっぽく考えたり、インターネットでいろんな保健だよりを見て型から入ってしまう。けど、「何を伝えたいか」「何を感じて学んでほしいか」が大切なので、型とか方法は後回しと改めて思った。そんなことは、当たり前で分かっているが、それっぽいものを作ろうと考えるから、いまいち伝えたいことが薄くなると反省し、今後に活かそうと思って聞いていた。
- ・誰に伝えるおたよりなのか、改めて考える機会になった。せっかく作ったおたより、ランドセルの底やカバンの中で体操服と一緒にしわくちゃになってしまわないように、読んでもらえるお便りにすることが求められるのだと思う。育児書や教育読本に書いてあるようなお約束のようなお便りは味気ない。子どもや保護者や教師の目を引く、その学校（それぞれの教室や保健室など）オリジナルの特色を取り入れたものでタイムリーな内容であることの大切さが分かった。
- ・私自身、子どもに何を伝えたいことを十分に明らかにせず、ただ「運動会・遠足の時期だから」「インフルエンザが流行する頃だから」と時期ばかりに気を取られていた。これから

は子どもたちが豊かな人生を歩むために、自分はどのようなことを伝えたいのか、どのように伝えていくのかを明確にし、子どもの心にまっすぐに伝わるようなねがいとねらいを持って保健だよりを作成していきたい。

- ・本来は、学校における保健に関する実態から、子どもたちや保護者、または先生方に対して情報を発信したり考えるきっかけを与えたりするために保健だよりが有効なのだと思う。しかし、実習やボランティアを通して保健だよりを作成していると、どうしても“上手に作ろう”や“マネをしてみよう”といった考えが先行している自分がいる事に気付いた。

- ・自分の伝えたいことは、どうしても主観的になりがちなので、読み手目線で内容やレイアウトを考えていくこともまた大切だと学んだ。

- ・実習などでの自分の行動を振り返っても、ねがいを持ちながらも目のねらい（方法）にとらわれ、時に見失ってしまっていたこともあった。「でどうする」という言葉で表わされるように、実際に自分がどのように動くことができるのかということが重要だ。

- ・今までの自分の考えでは、自分のやりたい内容、伝えたい内容と、ひたすらよがりなたよりを作成していたが、まずは子どもたちにどんなねがいを持つか考えることを大切にしていきたいと感じた。また、読んでもらう工夫についても、ほんの少し手を加えるだけで読みたくなる文字・絵になることを知り、手書き作成のあたたかみや作成者の思いを感じることで読めたよりになると感じたので、手書きでたよりを作成してみようと思った

- ・先生の失敗談、私も実習で根本が同じような失敗をしたので、振り返りながら聞いていた。私は4年生の保健学習をした時に、児童の興味を引くため、楽しいと思ってもらえる授業にするために様々な作業を多く取り入れたが、実際の授業では児童は楽しくやっていたが、作業に気を取られ過ぎて何のためにその作業を行っているのか見失っていた。今日の講義を聞きながら、私も、ねがい（方向）よりもねらい（方法）ばかりを考えてしまっていたし、自分が何を伝えたいか明確になっておらず、児童に伝わっていなかったと思う。児童の興味を引くことも大切だが、1番は“ねがい”が伝わることだということを改めて感じた。

【教育観や授業観への関連付けた思考】

- ・今日の講義の内容は保健だよりに限らず教師として1つ1つの仕事をする上で大切になってくることだと思うので、どんな仕事の時も忘れないようにしていきたい。

- ・保健だよりもそうだが、授業をする時も相手が聞きやすくなるにはどうしたらいいのかということを考えて行動していくことが大事だと学ぶことができた。

- ・子どもと関わる時に、なぜ、なんのために、どんな力を育むために ということを考えて関わるように自分の教育観を作り、今後に生かしていきたい。

- ・教育者として教えるということを意識していかなければならない。その教育者が何を伝えたいのかという目標をしっかり持ち、その方法について十分検討できていなければ効率が悪く、また子どもたちに教えられるものも少なくなってしまうと感じた。保健だよりも、どれだけ大切なことを含んでいても読んでもらえなければ意味がない。相手は誰なのかを考え、活用してもらえる工夫をすることで、保健だよりがただの紙切れになるのか、その後の人生に役立ってくれるのか変化してくるのだと思った。

- ・今後、自分はどうのように“教えていくのか”についても深く学べた。誰に何を伝えたいのか、自分の現状を把握して、問題を明確化し、その後どうするのか、自分自身の経験を大切にし、生かしながらかけていきたいし、自分も行動していきたい。

- ・今回の講義は、たよりを作成する時だけでなく、子どもたちと関わる時にも活用できると思う。まずはねがいをもち、現状を見つめ、何が問題かを明確にし、ねらいを定めていくということを頭において、今後の活動に活かしていきたい。

- ・「ねがい」と「ねらい」を考える事は、保健だよりだけではなく、保健指導や健康相談などあらゆる場面において重要なことだと学ぶことができた。

【今後作成したい保健だより】

- ・働いてから、子どもたちが自分たちに関係するものだと興味を持ってくれて、あたたかみのある保健だよりを作成していきたい。

- ・手書きの保健だよりは自分では到底出来ないと言っていたが、手書きにする事で生徒も読みやすくなるし、自分も楽しく書けそうだと思った。チャレンジしてみたい。

- ・私も養護教諭になった時には、毎回保健だよりを見直し、改善していきながら、私の保健だよりというものを作れるように努力していきたいと思う。

- ・養護教諭にとって、保健だよりは、子どもたちやその保護者、教職員とコミュニケーションをとる1つの方法であるので、今回の学びを生かしてみんなに読んでもらえる保健だよりを書きたい。

【教育観や授業観への関連付けた思考】では、講義の内容を「教師として1つ1つの仕事をやる上で大切になってくる」「授業をする時も相手が聞きやすくなるにはどうしたらいいのか」ということを考えて行動していくことが大事」「自分の教育観を作り、今後に生かしていきたい」「教育者として教えるということを意識」「子ども

たちと関わる時にも活用できる」「保健指導や健康相談などあらゆる場面において重要なこと」と学んでいた。【今後作成したい保健だより】では、「あたたかみのある保健だより」「手書きの保健だより」「読んでもらえる保健だより」を作成しコミュニケーションをとっていきたいと考えていた。

V. 考察

学生たちは、養護教諭として勤務する際には、保健だよりの読み手から、保健だよりの書き手と立場が変化する。そのため、読み手から書き手として意識を変えて行く必要がある。書く方法やテクニックだけではなく、何を保健だよりで伝えるかという、書き手のメッセージも必要である。それは、養護教諭の思いや考えを伝える手段として保健だよりを活用することになる。

保健だよりの読み手からすると【興味を引く内容】【知らない情報の掲載】が書かれていると楽しみであり、少し突っ込んだ【知らないことや詳しい内容】が楽しみとなっていた。また、【委員会活動の記載】は読み手にとっては仲間の活動を知ることにつながり楽しみであり、先生の一言コラムも楽しみな内容となっていた。つまり、分からないことが保健だよりを読むことによって分かり、なるほどと思うような内容が書かれていることや同級生が活動している委員会活動の様子が生き生き書かれていると興味を持ち、保健だよりを楽しみに読むことが明らかになった。一言コメントなどを読む楽しみは、保健だよりを読むことにより、紙面を通して書き手である養護教諭を身近に感じたり、その養護教諭の考えを知ったりするために楽しみになると考えられる。近年では、インターネットや書籍に添付されたCDにより手軽に保健だよりをコンピュータで作成することが可能である。しかし、それはその学校にいる子どもたちに合

わせた内容ではなく、時期や行事に合わせた、いわゆるどこの学校でも使える一般的な内容が多く含まれ、書き手である養護教諭から発信されるその学校の児童生徒に対応させたメッセージは含まれていない。学生たちは現職教員の講義を受けることにより、従来の知識伝達型、行事のお知らせや結果のお知らせ型の「一方的に伝えたいことを載せるのではなく」、保健だよりには「子どもたちが今注目していること、話題になっていること、現状の課題などしっかりと把握して」書く必要があると認識が変わっていた。さらに、「保健だよりを作ることが目的になっていた自分に気付かされた」者や「何を伝えたいか」「何を感じて学んでほしいか」が大切なので、型とか方法は後回しと改めて思った。そんなことは、当たり前で分かっているが、それっぽいものを作ろうと考えるから、いまいち伝えたいことが薄くなる」と考えた者もあり、目の前にいる子どもたちを対象に「その学校（それぞれの教室や保健室など）オリジナルの特色を取り入れたものでタイムリーな内容であることの大切さが分かった」と気づいていた。

一方、【文字が多く読みにくい】ものや【ありきたりの内容であった】保健だよりに対して、読み手は読む楽しみを抱かないことも明らかとなった。子どもに伝えたいことを明確にせず、ただ「運動会・遠足の時期」だから、「インフルエンザが流行する頃」だ

からと時期ばかりに気を取られていた保健だよりは、メッセージ性のない、ありきたりの内容となるため、読み手の興味関心も薄れる。そのため、ランドセルの底やカバンの中で体操服と一緒にしわくちゃになってしまう保健だよりとなることを再認識していた。

保健だよりは【保護者が読むものだと思っていた】と考えていた学生もいた。書き手として保健だよりを作成し、配布する際には、学級担任等に対する協力依頼や保健指導への活用も含めて考えていく必要がある。関連の講義内容に保健だよりの健康教育への活用方法を含んで授業構成をして行く必要がある。

【興味関心がなかった】読み手に対して、関心を持ってもらう保健だよりを作成して行くためには、イラストや文字も大切である。しかし、講義を通して養護教諭としての願いや考え、さらには自校の児童生徒にどのように育って欲しいかといった基本的な考えが必要なことに気づいていた。

また、現職教員（担任）による養護実践（健康診断演習を含む）の講義は、【自分の経験を振り返る】省察の機会になった。学生は、自身が作成した保健だよりを省察し、その内容を基に【今後作成したい保健だより】を考えていた。【保健だよりに対する考え方】【実践に結びつくスキル】の役立ち観だけでなく、【教師としての考え方】も捉えていた。保健だより作成に対する学びに加えて、【教育観や授業観への関連付けた思考】を得ることにより、保健だよりを活用した養護実践を教育的視点から考えることができていた。

これらの結果から、調査1における「保健だよりに対する学生の意識調査」から明らかになった問題点に対して、大学の授業等でそれらを改善するために保健だよりの学びの手立てとして、次のようなカリキュ

ラムを提案することができる。その具体的な手立てとしては、従来の講義および養護実習での実践に加え、新たな取り組みとして学級通信による教育実践を行っている現職教員（担任の視点）による講義を有機的に結びつけることである。これらを有機的に結びつけることにより、学生は、保健だよりの教育的意義に対する認識を高め、教育実践のとして情報発信力を高めることができる。

VI. 研究の限界性と今後の課題

本研究は調査対象者が36名と少ないため一般化するにはさらに継続的な調査を行い分析する必要がある。さらに、各授業科目を有機的に結びつけるための順序性と各授業科目で押さえるねらいを確認する必要がある。

謝辞

調査にご協力くださいました養護教諭特別別科のみなさまに感謝いたします。

注1

金沢大学養護教諭特別別科は、看護師国家試験に合格し厚生労働大臣の免許を受けている者、保健師助産師看護師法第21条に定める看護師国家試験の受験資格を有するものあるいは見込みのものを入学資格者として、1年間で教職に関する科目や養護に関する科目を専門的に学び、養護教諭1種免許状を取得させる課程である。

注2

養護教諭の英文表記

養護教諭は、school nurseと異なる教育職員であり、学校における教育活動をとおりして活動を行っていることから、日本養護教諭教育学会の英文表記を採用し、Yogo teacherと示した。

引用文献

- 1) 健康教室編集部：アンケート結果に見る保健だより&掲示物の今、健康教室第62巻、第13号(通巻922号)、2-8、東山書房、2011
- 2) 宮本阿希、村島奈苗、山本貴裕、米田茉緒：保健だよりの機能別分類一校種・発行月による比較一、養護実践研究集録1、76-89、金沢大学養護教諭特別別科、2012

3) 藤田和也：養護教諭が担う「教育」とは何か、174-190、農文協、2008

要約

本研究は、養護教諭の実践に活用されている保健だよりの学びの手立てを検討することを目的とした。養護教諭特別別科の学生を対象に、これまでの保健だよりの印象と講義後の感想を調査した。その結果、保健だよりが印象に残っているもの19名(52.8%)、残っていないもの17(47.2%)であった。保健だよりを読む楽しみは、楽しみではなかったものの方が多く、【興味関心がなかった】【保護者が読むものだと思っていた】【文字が多く読みにくい】【ありきたりの内容であった】の4カテゴリーが抽出された。現職教員による講義後の感想からは、【保健だよりの内容やレイアウトの工夫】【保健だよりの「願い」と「ねらい」】【自分の経験を振り返る】【教育観や授業観への関連付けた思考】【今後作成したい保健だより】の5カテゴリーが抽出された。このことから、大学の講義、臨地での実践、現職教員からの学びなどの科目は有機的に結び付けることができる可能性を含んでいる。

Abstract

This study was conducted to ascertain an effective mode of learning for a school health newsletter used for *Yogo* teacher practice. Subjects were students taking a special course for *Yogo* teachers. After lectures, we assessed their impressions and thoughts related to a school health newsletter. Results revealed that the school health newsletter left impressions on 19 subjects (52.8%), but left no impression on 17 subjects (47.2%). In terms of pleasure in reading the school health newsletter, most students did not think it was enjoyable. The following four categories of responses were extracted: [I was not interested], [I assumed that they were for guardians to read], [they are too lengthy and were difficult to read], and [the contents were unremarkable]. From the after-lecture comments, the following five categories were extracted: [devices for the contents or the layout of the school health newsletter], ["hopes" and "aims" of the school health newsletter], [reflecting on one's own experiences], [thinking linked to the view of education or the view of classroom teaching], and [the school health newsletter I want to create in the future], which suggests that topics such as university lectures, learning from in-service teachers, and on-the-job practical training can be linked in an organic manner.